2022年11月12日研修会

**「民衆の目に映る歴史～二・二六事件を例に～」**

九州大学文学部4年　中田蓮太郎

目次

１．二・二六事件とは

２．新聞報道より

３．同時代人の日記より

４．まとめ、考察

５．参考文献

１．二・二六事件とは

昭和十一年（一九三六）二月二十六日の払暁、東京市に起きた陸軍の反乱事件。将校二十名、もと将校二名、准士官一名、下士官八十八名、兵千三百五十七名が、総理大臣岡田啓介、内大臣斎藤実らを襲撃、また別動隊は、神奈川県足柄下郡湯河原町で前内大臣牧野伸顕を襲撃した。西南戦争以来、最大の国内事件であり、クーデターとも称される。（後略）[[1]](#footnote-1)

２．新聞報道より

【例】『東京朝日新聞』昭和11年2月27日付朝刊2面

「昨早暁一部青年将校等各所に重臣を襲撃　内府、首相即死」

〔各襲撃場所と被襲撃者、負傷状況などを記載の上〕

これら将校等の決起せる目的はその趣意書によれば内外重大危急の際元老、重臣、財閥、軍閥、官僚、政党等の国体破壊の元凶を排除し以て大義を正し、国体を擁護、開顕せんとするにあり、右に関し在京部隊に非常警備の処置を構ぜしめられたり

→「斎藤内府、渡辺総監、岡田首相ら即死す」『大阪朝日新聞』昭和11年2月27日付朝刊1面、「国体擁護を目的に決起　首相、内府、教育総監即死　侍従長重傷、蔵相負傷」『東京日日新聞』昭和11年2月27日付朝刊2面、「首相、内府、教育総監　昨暁襲撃され即死　一部の青年将校決起」『大阪毎日新聞』昭和11年2月27日付朝刊1面、「青年将校各所を襲撃　首相、内府、教育総監即死　侍従長重傷、蔵相負傷す」『読売新聞』昭和11年2月27日付朝刊2面についても同様の報道

昭和11年2月28日から昭和11年3月9日までの各新聞社の内容（一部）

|  |  |  |  |
| --- | --- | --- | --- |
| **日付** | **内容（一部）** | **新聞社** | **頁** |
| 昭和11年2月28日 | 高橋前蔵相相薨ず | 東京朝日新聞 | ２ |
| 〃 | 近在部隊も着京し警戒、配備を厳にす　平穏にして変化なし　戒厳[[2]](#footnote-2)司令部発表 | 大阪朝日新聞 | １ |
| 〃 | 市内平穏・変化なし　交通機関も通常通り　警戒配備を厳にす | 東京日日新聞 | ２ |
| 〃 | 近在部隊も上京し戒厳司令官隷下に入る　市内はその後平静 | 大阪毎日新聞 | １ |
| 〃 | 流言に惑ふこと勿れ　帝都の治安維持全し　交通は停止せず平常通り　戒厳司令部の発表 | 読売新聞 | ２ |
| 昭和11年2月29日 | 戒厳司令官下の軍隊　大命を奉じて行動中　騒擾部隊永田町付近に屯す　その他の地区は平静 | 東京朝日新聞 | ２ |
| 〃 | 戒厳司令官隷下の軍隊　大命を奉じて行動　軍紀厳正・士気また旺盛なり　永田町一小部分以外は平静 | 大阪朝日新聞 | １ |
| 〃 | 永田町一部を除き帝都は依然平静　戒厳司令官適応措置中 | 東京日日新聞 | ２ |
| 〃 | 騒擾部隊に対して適応なる措置を講ず　小部分を除き市内平静 | 大阪毎日新聞 | １ |
| 〃 | 騒擾せる部隊に対し戒厳軍適応の措置　永田町以外帝都平静　昨夜戒厳司令部から発表 | 読売新聞 | １ |
| 昭和11年3月1日 | 岡田首相生存す　射殺されたは義弟　内相の首相代理解かる | 東京朝日新聞 | ２ |
| 〃 | この機に更始一新　国軍の真価を充実　叡慮に酬い奉らん | 大阪朝日新聞 | １ |
| 〃 | 事件を機に更始一新　強固団結を期す　川島陸相決意を闡明 | 東京日日新聞 | １ |
| 〃 | 遭難者は全く別人　義弟松尾大佐と判明 | 大阪毎日新聞 | １ |
| 〃 | 帝都ここに明朗　時局収拾万全の方策　政府、けふ声明を発表 | 読売新聞 | ２ |
| 昭和11年3月2日 | 後継内閣の首班詮衡　混沌として帰一せず　噂に上る有力顔触れ | 東京朝日新聞 | ２ |
| 〃 | 挙国一致を主眼に強力なる首班を詮考　噂に上る平沼、近衛、河合諸氏 | 大阪朝日新聞 | １ |
| 〃 | 収拾の責任を負ひ西園寺公愈々上京　首班・重臣会議に諮る | 東京日日新聞 | ２ |
| 〃 | 今次反乱の元将校野中四郎大尉自決す　その他は衛戍刑務所に収容　帰順兵は夫々兵営に隔離 | 大阪毎日新聞 | １ |
| 〃 | 愈よ後継内閣組織へ　広く有為の人材網羅　強力挙国一致に邁進 | 読売新聞 | ２ |
| 昭和11年3月3日 | 後継内閣首班につき園公御下問を賜はる　御猶予を乞ひ御前退下　けふ六重臣と会談 | 東京朝日新聞 | ２ |
| 〃 | 園公、けふ具に六重臣の意見を聴取　更に陸、海両相をも招く？　最適任者を近く奉答 | 大阪朝日新聞 | １ |
| 〃 | 後継内閣、内大臣後任西園寺公御下問を拝す　直ちに重臣と協議開始　奉答準備・心肝を砕く | 東京日日新聞 | ２ |
| 〃 | 参内の西園寺公に畏し、約一時間御下問　暫時の御猶予を請ひ奉り枢相、宮相らと協議 | 大阪毎日新聞 | １ |
| 〃 | 西園寺公御下問奉答の準備　最も有力視さるるは平沼男爵と近衛公 | 読売新聞 | ２ |
| 昭和11年3月4日 | 園公慎重、終日動かず　けふ愈重臣と会見か　政局の重大性を反映 | 東京朝日新聞 | ２ |
| 〃 | 七大将軍事参議官　引責・現役引退を表明　林、眞崎、阿部、荒木、西、植田、寺内の各大将 | 大阪朝日新聞 | １ |
| 〃 | 七軍事参議間進退伺　軍長老として責任闡明 | 東京日日新聞 | ２ |
| 〃 | 園公、極めて慎重　各方面の動向見極む　宮、枢両相の意向を聴衆 | 大阪毎日新聞 | １ |
| 〃 | 陸軍の全長老恐懼引責　現役勇退を決意　陸相と軍事参議官連袂 | 読売新聞 | ２ |
| 昭和11年3月5日 | 西園寺公の重責倍加　後継首相再詮衡　けふ更に奉答せん | 東京朝日新聞 | ２ |
| 〃 | 降下の組閣大命を近衛文麿公拝辞す　園公、枢相との会見の上恐懼して再び拝謁 | 大阪朝日新聞 | １ |
| 〃 | 内府に湯浅現宮相　宮相に松平大使内定　今日中に親任式か | 東京日日新聞 | ２ |
| 〃 | 非常時局を乗切る　確信なき旨恐懼奏上　昨午後参内、別殿において園公、枢相と協議 | 大阪毎日新聞 | １ |
| 〃 | 時局収拾に一頓挫　近衛公大命拝辞の結果　後継内閣、全く予断許さず | 読売新聞 | ２ |
| 昭和11年3月6日 | 組閣手際よく進行　けふ親任式挙行　確定せる閣僚の顔触 | 東京朝日新聞 | ２ |
| 〃 | 清新・強力“挙国”に邁進　軍部両相ら主要閣員確定　けふ中にも親任式御挙行 | 大阪朝日新聞 | １ |
| 〃 | 重要閣僚の詮衡進み廣田内閣根幹成る　けふ中に親任式挙行 | 東京日日新聞 | ２ |
| 〃 | 官邸を組織本部に直に閣員詮衡を開始　軍部、大蔵等既に決定　けふ・親任式挙行 | 大阪毎日新聞 | １ |
| 〃 | 広田内閣全貌　拝命直ちに組閣に着手　挙国一致の実現を図る | 読売新聞 | ２ |
| 昭和11年3月7日 | 陸軍と妥協成らず　組閣行悩の儘持越し　けふ寺内大将の再度訪問　局面展開の鍵を秘む | 東京朝日新聞 | ２ |
| 〃 | 外相、難関打開に苦慮　組閣完成に飽まで邁進　“陸軍の条理ある主張は容れる”　けさ、寺内大将と再会見 | 大阪朝日新聞 | １ |
| 〃 | 今朝成否を賭けて寺内大将と重要会見　指導精神・根本的対立 | 東京日日新聞 | ２ |
| 〃 | 投げ出し？組閣続行？　今朝最後的会見　廣田外相と寺内大将　閣僚詮衡に軍部頗る強硬 | 大阪毎日新聞 | １ |
| 〃 | けふ新対案を掲げて廣田氏寺内大将と会見　結局は流産に終るか | 読売新聞 | ２ |
| 昭和11年3月8日 | 陸軍の希望と照合し再詮衡着々進捗す　今朝廣田、寺内三次会見 | 東京朝日新聞 | ２ |
| 〃 | 吉田氏ら入閣辞退　椅子の入替へを断行　組閣本部の膳立進む　けふ廣田、寺内三次会見 | 大阪朝日新聞 | １ |
| 〃 | 馬場氏を参謀に凝議　再人選大体成る　けふ三たび寺内大将を招き廣田外相から内示す | 東京日日新聞 | ２ |
| 〃 | 軍部が同意すれば急速に組立を完了　但し情勢楽観を許さず　けふ廣田、寺内第三次会見 | 大阪毎日新聞 | １ |
| 〃 | 組閣工作また持越し　屈しつヽねばる廣田氏　寺内大将とけふも会見 | 読売新聞 | ２ |
| 昭和11年3月9日 | 組閣難関漸く緩和　両大将と廣田外相　会談実に四時間余！　今朝改めて最後折衝 | 東京朝日新聞 | ２ |
| 〃 | けふ第四次会見　愈よ組閣成否を岐つ　相党了解を深めたるもなほ幾分難点を残す | 大阪朝日新聞 | １ |
| 〃 | 軍部との妥協成らず　けふ更に第四次会談　陸軍側、広汎な国策覚書提示　組閣本部、難関に困惑 | 東京日日新聞 | ２ |
| 〃 | 軍部の主張強く妥協成立に至らず　寺内・永野両大将と廣田氏の会見　“廣田内閣”の陣痛続く | 大阪毎日新聞 | １ |
| 〃 | 難航　廣田内閣成否の鍵　組閣精神を叩く　両大将から具体的追及 | 読売新聞 | ２ |

『東京朝日新聞』『東京日日新聞』『読売新聞』の二・二六事件発生から廣田内閣組閣までの社説[[3]](#footnote-3)

|  |  |  |
| --- | --- | --- |
| **日付** | **題目** | **新聞社** |
| 昭和11年2月28日 | 帝都に戒厳令布かる | 読売新聞 |
| 昭和11年2月29日 | 一億臣民一致の義務 | 東京朝日新聞 |
| 昭和11年3月1日 | 帝都平穏に帰す | 東京朝日新聞 |
| 〃 | 岡田首相生存と事態収拾 | 東京朝日新聞 |
| 〃 | 騒擾全く鎮定す―転禍為福の一大決心を要す | 東京日日新聞 |
| 〃 | 帝都平安に復す | 読売新聞 |
| 〃 | 岡田首相健在 | 読売新聞 |
| 昭和11年3月2日 | 慎重を要する事件後の財界 | 東京朝日新聞 |
| 昭和11年3月3日 | 責任観念の闡明に発足せよ | 東京朝日新聞 |
| 〃 | 後継内閣組織と軍部―陸相声明の示唆 | 東京日日新聞 |
| 昭和11年3月４日 | 慎重なるべき財政策―高橋財政再検討の機 | 東京日日新聞 |
| 昭和11年3月5日 | 後継内閣の性質と使命 | 東京朝日新聞 |
| 〃 | 粛軍の第一歩―七軍事参議官の決意 | 東京日日新聞 |
| 昭和11年3月6日 | 大命広田氏に降る―粛軍第一 | 東京日日新聞 |
| 〃 | 広田弘毅氏大命を拝す | 東京朝日新聞 |
| 〃 | 広田内閣に対する期待 | 読売新聞 |
| 昭和11年3月7日 | 難関打開の来気魄と用意 | 東京朝日新聞 |
| 〃 | 組閣行悩み―火急に過ぎた | 東京日日新聞 |
| 〃 | 組閣工作の行悩み | 読売新聞 |
| 〃 | 内府宮相決定―元老獻替の跡 | 読売新聞 |

（以下二つは上表における社説の一部）

「騒擾全く鎮定す―転禍為福の一大決心を要す」『東京日日新聞』昭和11年3月1日付朝刊2面

一　（前略）情理をしての諭告が契機となつて、「皇軍互に相撃つが如き」「皇国精神上忍び得ざる局面の展開を見ずに、この不祥事が一段落を告げたことは誠に不幸中の幸いであつたといはねばならなぬ。

二　騒擾そのものは正に完全に鎮圧され、国民は未だ嘗て経験したことのない白日の■〔悪だろうと思われる〕夢から解放された。しかしながら、騒擾の由つて来たれる原因は何であるか。その原因は何処にあるか。〔中略〕国民の指導的立場にある人々にして、真正の意味に於ける挙国一致の精神を体得し、身を挺してこの難局に直面する断乎たる決心と勇気とがあるならば、この空前の禍を転じて、より強靭なる躍進日本の原動力たらしむることは、よしその前途に困難があるにしても、出来難いことでは勿論ない。

〔後略〕

「後継内閣組織と軍部―陸相声明の示唆」『東京日日新聞』昭和11年3月3日付朝刊3面

一　事件鎮定して国民みな平生の■につくとはいひながら、対外信用の上からいつても、また国民の不安を一掃する点からいつても、後継内閣の決定が一日も早からんことは、全国的の切望である。〔後略〕

〔中略〕

三　〔前略〕陸相は〔中略〕今回の事件に対する重代の責任を自覚してゐるのである。おそらくこの責任の自覚は陸相一人のみの所感ではあるまいと思ふ。「軍内より未曽有の反乱を惹起」したについては、全陸軍がその責任として「恐懼痛恨」してゐるところではあるまいか。しかしてこの全陸軍の一致したる自覚があるからこそ、陸相がその声明の後半において闡明してゐる決意が意義あるものとなるのである。

四　〔前略〕この声明にあらはれたる治安の完全なる回復と粛軍の完結には、軍部一致の力をもつてこれに■る覚悟が出来てゐると見てさしつかへない。

五　治安の完全なる回復に到る第一歩は、いふまでもなく後継内閣の成立である。

〔後略〕

→「内容は軍部の鼻息を窺い、批判的な言葉は一切含まれていなかった」、「二・二六事件について、国民の変わって真正面から暴力、テロを批判し、軍部ファッショと対決する姿勢のものではなく、軍部の腐敗の責任を政治の刷新、国民の義務にすり替えたものだった」

二・二六事件以後の『時事新報』[[4]](#footnote-4)の社説で、軍部批判、時局批判のもの[[5]](#footnote-5)

|  |  |
| --- | --- |
| **日付** | **題目** |
| 昭和11年2月28日 | 偉大なる日本国民の沈着 |
| 昭和11年2月29日 | 突発事件と財界 |
| 昭和11年3月1日 | 帝都の治安完全に回復 |
| 昭和11年3月3日 | 子供に何と説明するか |
| 昭和11年3月4日 | 後継内閣と各政治勢力 |
| 昭和11年3月5日 | 財界と後継内閣 |
| 昭和11年3月6日 | 大命広田外相に下る・粛軍即ち強兵 |
| 昭和11年3月7日 | 殉職警察官に愧づ可し |
| 昭和11年3月8日 | 寺内大将に望む |
| 昭和11年3月10日 | 広田内閣漸く成る |
| 昭和11年3月12日 | 人心安定の為に |
| 昭和11年3月18日 | 広田内閣の政綱声明 |
| 昭和11年3月19日 | 青年に希望を持たせる政治 |
| 昭和11年3月22日 | 暗殺沙汰を絶滅す可し |
| 昭和11年3月26日 | 高橋是清翁の国民葬 |
| 昭和11年3月27日 | 粛軍の希望を与ふ |

【小括】

当時の『朝日新聞』の発行部数が約200万部、『時事新報』が約20万部

↓

・ほとんどの新聞読者が、二・二六事件について批判的な報道を眼にしていない

・二・二六事件の被害者や政府の対応についてのみ認識、事件の背景などについては不明

という状況が考えられる

３．同時代人の日記より

・永井荷風

『断腸亭日乗』昭和11年2月26日条

〔前略〕午後二時頃歌川氏電話をかけ来り、軍人警視庁を襲ひ同時に朝日新聞社日ヽ新聞社等を襲撃したり。各省大臣官舎及三井邸宅等には兵士出動して護衛をなす。ラヂオの放送も中止せらるべしと報ず。〔後略〕

『断腸亭日乗』昭和11年2月27日条

〔前略〕午後市中の光景を見むと門を出づ。東久邇宮門前に憲兵三四名立つ。道源寺阪を下り谷町通にて車に乗る。溜池より虎の門のあたり弥次馬続ヽとして歩行す。海軍省及裁判所警視庁等皆門を閉ぢ兵卒之を守れり。〔中略〕朝日新聞社は昨朝九時頃襲撃せられたる由なれど人死は無之。印刷機械を壊されしのみなりと云ふ。（中略）居合す人々のはなしにて岡田斎藤等の虐殺せられし光景の大略及暴動軍人の動静を知り得たり。〔中略〕此日新聞に暴動の記事なし。

『断腸亭日乗』昭和11年3月14日条

〔前略〕一客あり二月廿六日兵乱の写真十数葉を携来りて示す。反軍の旗には尊皇討姦と大書したり。〔後略〕

永井荷風『断腸亭日乗』

①二・二六事件に関する記述量

→2月26日と27日に少々、それ以降はほとんど無し

②事件に関する内容

→新聞報道や街で見聞きした情報のみ

③著者の所感

→無し

・古川ロッパ

『古川ロッパ昭和日記・戦前編』昭和11年2月26日条

七時半起き、四谷から砧へ。三島の宿の撮影をしていると、伏水が大変なことが起ったさうだと言ふ、今朝四時六時の間に、五・一五事件以来の重大な暗殺事件があり、首相蔵相等五六人、軍部の手に殺されたと言ふ、その後流言ヒ語しきり、何処迄本当か分らず、無気味な気持ちのまヽ、撮影を続ける。〔中略〕渋谷からの環状道路にタンク出動物々しい、ラヂオのニュースきいたらやっぱり事件はほんとだった。〔後略〕

『古川ロッパ昭和日記・戦前編』昭和11年2月27日条

今朝が又早い。八時に徳山迎へに来た。昨日の大事件は各新聞に簡単に報道されてゐる、まだ詳しくは分らない。世間は騒然としてゐる。二月に芝居してなくてよかった。〔中略〕三時就床。世間まだ騒然たり。〔後略〕

『古川ロッパ昭和日記・戦前編』昭和11年2月28日条

〔前略〕世間は愈々騒然となり、革命軍は千余名、赤坂の幸楽や山王ホテルへ分れて陣取り、之を撃たんと軍隊が取りまいているのニュース、又、日劇その他の丸の内の劇場は軍隊に占領され、避難所となってゐるなどのニュース、続々入る。此んな時「篭の鳥でもチエある鳥はァ」なんて歌ってるのが不しぎだった。夕刻、P・C・L所長植村氏の説では革命軍引きあげ、平和に帰った、とのことだった。一時は今月は勿論、来月の芝居もだめかと思ったが、さうでもないらしい。と、又それがデマで、今にも市街戦が始まらうとしてるんだといふ。不安の中に、セットを続け二時近く迄やり、新宿でおでんとすしを食って帰る。深夜の新宿をタンクが通る、不安の中に更け行く。

『古川ロッパ昭和日記・戦前編』昭和11年2月29日条

〔前略〕ラヂオは他の一切の放送をやめて専らニュースを放送してゐる。アサウンサの声も上づってゐる、山王ホテルや幸楽に陣取ってゐた反軍がだんだん引き揚げて帰順しつヽあるとの報。〔中略〕ラヂオのニュースで、二時頃すっかり反軍帰順を終り平和となった報あり。四時すぎ迄下二にゐて、それから四谷へ見舞、殺されたと思ってた岡田首相は健在なりとのニュースあり、呆れる。〔中略〕今度のやうな騒乱は先ず一生に一度ぶつかるか何うかといふ位、めったにない騒ぎであらう。それが二十九日午後四時頃、漸く鎮定し、丸の内辺の交通も復旧した、そしてその途端――六時すぎから、丸の内の日劇・日比谷・地下等の映画館は興行を開始した、と、どしヾヽ客が入って行くのである。これを見てヽ、震災直後にも娯楽復興の早さには驚いたことだったが、如何に人間が娯楽を求めるものかヾうかヾへて感心した。〔後略〕

古川ロッパ『古川ロッパ昭和日記・戦前編』

①二・二六事件に関する記述量

→2月26日から29日にかけて記述、その後は無し

②事件に関する内容

→新聞、街の様子、ラジオなどからの情報

③著者の所感

→自身の芝居の仕事に対する事件の影響に関する所感が多い、事件そのものに関する書簡はほとんど無し

・西山光一

『西山光一日記』昭和11年2月26日条

朝は太左エ門宅に行き、奉公人をたづねに行き、上新宅へ行き女一人置いてもらふ事にきめてやっと安堵す。内へ帰り、手紙に二十四日たのんだ各村々の知合いへ手紙を出す。午后は政治より頭を刈ってもらった。［石松より藁売約手金、参拾円借りる］

『西山光一日記』昭和11年2月27日条

午前俵あみなして居た。午后も同様俵あみ。朝、小針勘之丞より室紙九十枚買って、油権兵衛より譲ってもらふ。

『西山光一日記』昭和11年2月28日条

午前は俵編みなした。十時、高田姉大学耳鼻科へ入院す。見送りなした。中食。半助父金弐百円持って来て貸せられた。それを持って太左エ門へ弐百二十五円、十一日に借りたのを返済なした。やっと太左エ門に対して話のけりが付いた。［小針半助より弐百円借る。太左エ門へ弐百弐拾五円返済す。高田姉中耳炎にて、手術に大学入院す］

『西山光一日記』昭和11年2月29日条

〔前略〕午后明日の総会についての準備相談なして、夕食まで太左エ門宅に。自分は田村繁夫現役曹長へ電話をかけたが、今回の事件に東京へ行き不在にて、明日の講演ねがふ事出来なかった。［太左エ門宅に青年役員会あり］

西山光一『西山光一日記』

①二・二六事件に関する記述量

→2月29日に「今回の事件」という言葉が見られる（二・二六事件を指すと思われるが断定はできない）以外無し

②事件に関する内容

→無し

③著者の所感

→無し

・三宅雪嶺

『同時代史』345-346頁

二十六日、帝都に雪が降ると見るや、永田町、霞ヶ関、日比谷方面の交通が周く遮断され、武装兵が緊張せらる姿勢にて警戒に任じ、朝来放送を中止せるラヂオが全国取引所の一斉休業を報ず。午後八時十五分、陸軍省は次の如く発表す。

〔発表内容〔中略〕〕

〔後略〕

『同時代史』347-349頁

二十六日夜、枢密院の御諮詢を仰いで東京市に戒厳令を布くに定め、二十七日午前三時半公布、九段軍人会館に戒厳司令部を設置し、東京警備司令官は香椎中将、戒厳参謀長は東京警備参謀涼安井少将、司令官は左の如く発表す。

〔発表内容〔中略〕〕

　午前十時半、九段偕行社に非公式軍事参議官会議を開催、林、眞崎、阿部、荒木、植田、西、寺内各参議官並に川島陸相等、中央首脳部が会合す。同十時、軍事参議官東久邇宮殿下が御参内、午後軍事関係の皇族方が続々御参内、宮中西二の間に御会同、後藤臨時首相代理、川島陸相、湯浅官相等陪席申上げ、時局に関して御懇談後、午後八時半御退出。

　閑院宮殿下も午後七時、御風邪に拘らず小田原より帰京あらせらる。二十八日午後十時半、戒厳司令部発表第三号に、

〔発表内容〔中略〕〕

とあり。戒厳司令部は皇軍相撃の痛恨事を避くるに肝胆を砕き、反乱部隊の説得に努めたるも思はしからず、二十九日早暁を期し、勅令に反抗せる反乱部隊として断乎武装鎮圧の決意を固め、午前六時、戒厳令中第十四条全部の適用を告諭すると共に、戒厳区域内の交通一切を停止、即ち市域の汽車、電車、乗合自動車は午前五時半より総べて運転を中止して、市外との通話をも禁止し、只ラヂオが刻々戒厳司令部の重要発表を放送す。戒厳司令部告諭中に、

〔告諭内容〔中略〕〕

と云ふが如き語あり。数台の陸軍機は説得ビラを積んで永田町付近の低空を飛行、兵に対してビラを撒布、被占領地域内へはタンクを乗入れて同じくビラを撒き、付近の飛行会館屋上より「勅令下る、軍旗に手向ふな」との文字を記せるアドバルーンを掲ぐ。尚ほラヂオの大拡声器にて「兵に告ぐ」として、

〔「兵に告ぐ」内容〔中略〕〕

とあるは一般に解し易く、「今からでも遅くない」と云ふ語が世間にて如何にもと思はれ、広く諺の如く通用す。戒厳司令部は次々に発表し、午後二時に全部の帰順を終り、全く鎮定を見るに至れるを告ぐ。三月四日、次の如き緊急勅令を公布、即日施行さる。

〔緊急勅令内容〔中略〕〕

三月四日午後一時半、戒厳司令部当局談として、事件に関する稍〃詳細なる内容を発表し、同六日には反乱部隊参加の下士兵千四百数十名の所属を明かにす。

〔後略〕

『同時代史』350-351頁[[6]](#footnote-6)

七月七日午前二時、陸軍省発表に、

［去る二月二十六日東京に勃発したる反乱事件については、その後特設せらる東京陸軍軍法会議において慎重審判中のところ、直接事件に参加したる将校一名、元将校二十名（内二名は事件直後自決死亡す）、見習士官三名、下士官二名、元准士官下士官八十九名、兵三百五十八名、常人十名、中起訴せられたる者は将校一名、元将校十八名、下士官二名、元准士官下士官七十三名、兵十九名、常人十名にして、七月五日その判決言渡を終了せり。〔後略〕］

判決理由書には先づ、

［被告人中、将校、元将校及重要なる常人らが国家非常の時局に直面して激発せる慨世憂国の至情と、一部被告人らがその進退を決するに至れる諸般の事情をに就いては、これを諒とすべきものなきにあらざるも、その行為たるや、聖論に悖り、理非順逆の道を誤り、国憲国法を無視し、而も建軍の本義を紊り、苟も大命なくして断じて動かすべからざる皇軍を借用し、下士官兵を率ゐて反乱行為に出たるが如きは、其の罪寔に重且大なりと謂ふべし、仍て前記の如く処断せり。］

とあるは、情理兼ね到れりと云ふべく、被告人が満足せると察すべきと同時、狭くして世間の趨勢変じつヽあり、広くして中外を通じ何等かの動乱の起らんとするを暗示しつヽありとも見るべし。

〔中略〕

死刑の言渡ありたる者は七月十二日、死刑を執行し、同十八日、戒厳令を解除するに決定し、緊急勅令を以て同十七日公布せらる。

『同時代史』355頁

　世界は動くべきに動きつヽあり、二・二六事件は一小火山の爆発に類し、旧習慣に囚はれたる者こそ驚きの目を瞠れ、大波乱の近づきつヽあるは種々の方面に現はれ、本年のメーデーが中止せるも戒厳令下なるにより、日独間に赤化防止を共同目的とする協定の交渉が進められ、十月二十三日、仮調印を見るに至れるは、当時表面通りに認められたるも、日独の接近は前の世界大戦と異なる方向を指しつヽあるを示す。〔後略〕

三宅雪嶺『同時代史』

①二・二六事件に関する記述量

→新聞、ラジオによる報道内容だけでなく、さらに詳細な情報が記述されている、事件後の裁判についても記述

②事件に関する内容

→政府側に視点から事件の経過を記述

③著者の所感

→二・二六事件を「一小火山の爆発に類」するものだと表現

【小括】

・日記を残すほどの人物であっても、事件について一般人より詳細な情報を得ているわけではない（永井・古川）

・新潟には事件が起こったこと自体は伝わっているが、そこに住む人の生活に直接的な影響を及ぼすものではなかったため、重要視されていない可能性が高い（西山）

・評論家、歴史家の立場になると、他の人と比べても情報量がかなり多い（三宅）

４．まとめ、考察

まとめ

・新聞報道からは、内容・量・傾向からして、民衆は二・二六事件に関する詳細な情報は得られなかった

・日記を残すほどの人物についてもほとんど同様の傾向

考察

・二・二六事件は民衆の目には表面的な部分しか映らなかった

・報道内容から、民衆の事件観には偏りがあった

・地方ではなおさらその傾向が強かった

５．参考文献

・平塚柾緒『二・二六事件』（河出書房新社、2006年）

・伊藤隆ほか『二・二六事件とは何だったのか―同時代の視点と現代からの視点』（藤原書店、2007年）

・土田宏成『日記に読む近代日本４　昭和前期』（吉川弘文館、2011年）

・黒沢文貴・季武嘉也編著『史料で読み解く日本史②　日記で読む近現代日本政治史』（ミネルヴァ書房、2017年）

・北博昭『二・二六事件　全検証』（朝日新聞社、2003年）

・遠山茂樹『遠山茂樹著作集』第八巻（岩波書店、1992年）

・柳田泉『哲人　三宅雪嶺先生』（実業之世界社、1956年）

・石坂富司「二・二六事件の地方波及について」（『日本大学史学会研究彙報』第10巻、27-40頁、日本大学史学会、1996年）

・永井壮吉『荷風全集』第23巻（岩波書店、1993年）

・永井壮吉『荷風全集』第24巻（岩波書店、1994年）

・永井壮吉『荷風全集』別巻（岩波書店、2011年）

・古川ロッパ『古川ロッパ昭和日記・戦前編』（晶文社、1987年）

・西田美昭・久保安夫編著『西山光一日記　1925-1950年』（東京大学出版会、1991年）

・三宅雪嶺『同時代史』第6巻（岩波書店、1954年）

・『国史大辞典』

・『日本国語大辞典』

・『東京朝日新聞』

・『大阪朝日新聞』

・『東京日日新聞』

・『大阪毎日新聞』

・『読売新聞』

1. 『国史大辞典』「二・二六事件（高橋正衛執筆）」参照 [↑](#footnote-ref-1)
2. **戒厳**　戦時、事変に際し、治安を維持するために、兵力をもって全国または一地域を警備すること。この区域内では、常法を停止し、行政権および司法権の一部もしくは全部を軍隊に移す。（『日本国語大辞典』） [↑](#footnote-ref-2)
3. 伊藤隆ほか『二・二六事件とは何だったのか―同時代の視点と現代からの視点』、前坂俊之「2　日本のメディアはいかに報じたか」89-90頁 [↑](#footnote-ref-3)
4. 「独立自尊、直言を憚らぬ論説」を展開する社説が取り柄、廃刊となる昭和11年12月25日までに約60本の社説で軍部批判、時局批判を展開 [↑](#footnote-ref-4)
5. 伊藤隆ほか『二・二六事件とは何だったのか―同時代の視点と現代からの視点』、前坂俊之「2　日本のメディアはいかに報じたか」89-90頁 [↑](#footnote-ref-5)
6. ［］内は、本文中における発表内容などを表す。 [↑](#footnote-ref-6)